

現代上下水道の

人物50傑

18



海渕 養之助

明治39年(1906年)~昭和52年(1977年)

海渕養之助氏は、明治39(1906)年11月石川県加賀市に生まれ、京都帝国大学工学部土木工学科を昭和5(1930)年に卒業後、京都市役所に勤務した。およそ13年間の京都市勤務の後、約2年間、民間会社に勤務している。ご本人から直接聞いたわけではないが、竹筋コンクリートの船の計画をされた

度終戦直前の物資のない時代でもあったことを思うと、そんな

下水道技術発展に貢献した技術界の重鎮

経験もしたのである。最近土木学会で学生によるコンクリート

力又一大会が開催されているが、70年程前に

鳥羽処理場の設計にも携わり、昭和10(1935)年に着手した。

下水処理場の建設にかかわった。

下水処理場の最後に神戸市を退職し、株式会社日本水道コンサルタント(現・㈱日水コン)に勤務し、取締役下水道部長、常務取締役、専務取締役下水道部長などを歴任した。

そのルーツがあったわけである。京都市役所では、吉祥院処理場の設計に従事し、運転管理にも携わった。氏の思い出話によるとあれやこれや外国の例を参考にされたそうである。ついで

水道資源利用の事例ではなからうか。

昭和21(1946)年に神戸市復興本部に勤務し、道路課長、下水道課長を歴任し、昭和32(1957)年から5年間で下水道部長を務め、神戸市最初の

道分野も水道部門となっていた)を取得し、昭和40(1965)年には、下水道事業に協力し公共の福祉の増進に貢献したとして、大臣表彰を受けている。また、昭和45(1970)年には、堤武氏と共著で『下水道終末処理施設「汚泥編」』を

氏は、海外の新しい技術に大きな関心を寄せている。昭和48(1973)年に、日水コンとして社員10名ほどで、当時有名であった米国タホ湖の3次処理実験施設の視察に団長として出かけている。タホ湖では、N、P除去のための実験としてアンモニアストリッピングや石灰凝集処理が行われていた。氏は、こうした物理化学処理は、日本の下水道には適さないとし、昭和50(1975)年に米国で行われているN、Pの生物学的処理を視察すべく、調査団の団長を務め、ネバダ州のリノース

パークスのリン除去施設などを訪問している。現在の日本の下水の高度処理が、すべて生物学的処理によっていることを思うと、氏の先見の明に感嘆する次第である。

氏は、当時の米国が土壌微生物による3次処理法の科学的検討から逆浸透による処理まで幅広く行っている研究態度はわが国も見習うべしとしている。その理由として、今後我が国の下水道が大都市から地方の中小都市へと移り行くことと、特に海外に向かって下水道技術を広めようとする場合、このような幅広い処理技術が必要となることを挙げている。ここにも、すでに日本の下水道技術の海外進出を予測している。常に、海外の目を向けながら、日本の下水道の行く末を見つめた下水道人であった。

(執筆 清水慧氏)